

【歴史・民俗】

近世の大坂湾と伊勢湾

——商業的諸関係を中心に——

東北大学東北アジア研究センター 准教授 荒武 賢一郎

はじめに

本稿は、近世における大坂湾と伊勢湾の商業取引に注目し、両地を結ぶ経済交流を明らかにする。湊町同士を取り上げるのではなく、大坂湾および伊勢湾を「面」でとらえ、双方の地域的特質に配慮しつつ、流通の展開を確認していきたい。この二つの地域は、当時の日本経済を支え、中心地の役割を担っていたが、実は地域間の物流に焦点を置いた場合、それほど多くの研究が存在するわけではない。伊勢湾で展開した海運や問屋の活動、そして諸商品が大坂との関係を有していたことの史実は明らかになる一方、大坂湾沿岸の事例は極めて限られた状況にある⁽¹⁾。その点を克服すべく本稿では、現段階で把握できる大坂湾沿岸における史料から、伊勢湾との関係に焦点を絞りたい。

近世以前の日本列島における海運史研究では、「大きな世界」と「小世界」という地域区分が定着してきた⁽²⁾。ここで「大きな世界」というのは、たとえば瀬戸内海、太平洋、日本海というような比較的大きな海域で、長い航路を有するエリアのことを指している。一方の「小世界」は、本稿が取り上げるような「伊勢湾と大坂湾」、あるいは「大坂と瀬戸内海」といった海域のことをいう。このような小世界がいくつも重なりながら、日本列島の海運が形成されるという理解だが、近世の海運においても

同じような見通しを立てることができるだろう。この点は先にもあげた伊勢湾や内海船の研究で取り組まれた成果に依拠できるが、改めて大坂の事例を突き合わせ、地域内の物流にはどのようなものがあったのかを理解していきたい。

本稿の具体的な課題は、以下の通りである。第一は大坂市場と伊勢湾地域の商品取引にはどのようなものがあるかを紹介すること、第二は堺商人・小西家が手掛けた伊勢湾の貝取引に注目し、両地の関係を解き明かすことである。

1. 近世大坂と伊勢湾の物流

近世大坂と伊勢湾の物流的諸関係は、非常に緊密なものであったと推測されるが、その課題を大坂側の史料から取り組んでみたい。言うまでもなく、江戸時代の商品流通は、基幹的存在である米穀のほか、両地の生産物ならば木綿や酒といったものが代表的であるといえよう。それでは、このような広域流通の主力商品以外はどのような動きを示していたのか。人々の日常生活に直結する食品に絞り、いくつかの事例を紹介していきたい。

(1) 大坂市場から伊勢湾地域へ

大坂から伊勢湾へ供給される物資ではつきりとわかりやすいのは、砂糖流通である。江戸時代前半の日本の砂糖というの

は、ほとんどが中国からの輸入であり、長崎に入ってそこから廻船および陸送を通じて全国に販売されていた。この輸入過多の状況が一変するのは、琉球および奄美大島で黒砂糖の生産が始まり、大量生産が可能になった江戸時代後期のことである。当時、琉球や奄美を支配下に置いた薩摩藩のみならず、砂糖の国産化は大規模に展開した。そのなかでもとりわけ、薩摩主導による黒砂糖の生産規模は年々拡大し、琉球や奄美のほか「本国」である薩摩半島や大隅半島でも江戸時代後期に領外移出を活発化させるようになる。薩摩藩は、自領で生産した黒砂糖を大坂市場で取引したが、年代によっていくつか取引のやり方は異なるものの、基本的には大坂蔵屋敷における入札で大坂商人が買付をして、そして全国に流通させるようになったのである⁽³⁾。その結果、薩摩藩は豊かな財政を勝ち取るようになった。

【表 1】には、薩摩藩の1798年（寛政10年）から1877年（明治10年）における大坂での黒砂糖取引についての数字をあげた。同藩による黒砂糖の領外取引はすべて大坂市場を介して行われたため、当時の全体をほぼ確認できるものである。補足すれば出典史料は、1901年（明治34年）に大坂の砂糖商・藤田助七が編集・執筆した「砂糖商業調査要項答申書」であるが、江戸時代の数量そのものは間違いのないと思われる。

まず、輸入の項目は現在の鹿児島県と沖縄県、当時の薩摩藩領産出の砂糖が大坂に入ってきた数量を記載した。その大坂へ送られた砂糖は輸出のところにあり、大坂から次の輸送地となる仕向先へと運ばれるのである。この仕向先は、「江戸」「北国」「畿内近江地方・山陰山陽」、そして「中東」

に分類されているが、中東は伊勢湾沿岸を含む東海地方を示す。この流れを1798年（寛政10年）の事例から説明すると、当年に生産地である琉球、大島、徳之島、喜界島から47,422挺の砂糖が大坂に運ばれ、それが江戸、北国、畿内近江地方・山陰山陽、そして東海地方に分散し、それぞれ販売されていることになる。1877年（明治10年）まで中東、つまり東海地方は出荷先としては3番手、4番手のところを行ったり来たりしており、必ずしも薩摩や大坂商人にとって最大の得意先ではない。ただし、ここでいう北国は、北陸から北海道にかけての地域を指しており、かなり大きな範囲といえる。また畿内近江地方・山陰山陽というのも、現在の近畿地方から中国地方にかけての地域であり、かなり広い地域設定がなされている。つまり、東海地方はここでの順位は非常に低いけれど、地理的および人口的な規模を考慮すれば、この輸出货量というのはかなり大きな数字だったといえよう。ちなみに、1872年（明治5年）まで大坂市場はこの4地域に砂糖を出荷するものの、1877年（明治10年）になると、仕向先には江戸（東京）の名前は姿を消す。なぜならば、東京への砂糖移出は大坂を経由せずに、鹿児島からの直接取引になるからである。

1877年（明治10年）以降、国産の黒砂糖は「和黒糖」とよばれ、大坂から各地へ出荷されていたが、その割合は北陸から北海道にかけてが最も多く40%余りを占め、尾張・三河から東京にかけては20%、中国・和歌山・近畿が同じく20%、そして九州・四国が20%であった。このような割合で大坂に入ってきた砂糖の販売がなされていたと思われる。

表 1 近世後期～明治初年大坂における黒砂糖集散高

年次	輸入		輸出	
	産地	数量(単位:挺)	仕向先	数量(単位:挺)
寛政10年 (1798)	琉球・大島・徳ノ島・喜界島	47,422	江戸	18,970
			北国	11,855
			畿内近江地方・山陰山陽	9,484
			中東	7,113
小計		47,422		47,422
天保11年 (1840)	琉球・大島・徳ノ島・喜界島・ 永良部島・与論島・桜島・垂水・ 新城・種ヶ島	160,504	江戸	64,203
			畿内近江地方・山陰山陽	32,100
			中東	32,100
			北国	24,075
小計		160,504		【160,504】
嘉永6年 (1853)	琉球・大島・徳ノ島・喜界島・ 永良部島・与論島・桜島・垂水・ 新城・種ヶ島	140,380	江戸	56,152
			北国	35,095
			畿内近江地方・山陰山陽	28,076
			中東	21,057
小計		140,380		140,380
安政5年 (1858)	琉球・大島・徳ノ島・喜界島・ 永良部島・与論島・桜島・垂水・ 新城・種ヶ島	148,127	江戸	59,250
			北国	37,033
			畿内近江地方・山陰山陽	29,625
			中東	22,219
小計		148,127		148,127
文久元年 (1861)	琉球・大島・徳ノ島・喜界島・ 永良部島・与論島・桜島・垂水・ 新城・種ヶ島	174,818	江戸	69,927
			北国	43,705
			畿内近江地方・山陰山陽	34,963
			中東	26,223
小計		174,818		174,818
慶応元年 (1865)	琉球・大島・徳ノ島・喜界島・ 永良部島・与論島・桜島・垂水・ 新城・種ヶ島	155,738	江戸	62,295
			北国	38,935
			畿内近江地方・山陰山陽	31,148
			中東	23,360
小計		155,738		155,738
明治元年 (1868)	琉球・大島・徳ノ島・喜界島・ 永良部島・与論島・桜島・垂水・ 新城・種ヶ島	171,240	江戸	68,496
			北国	42,810
			中東	25,686
			畿内近江地方・山陰山陽	34,248
小計		171,240		171,240
明治5年 (1872)	琉球・大島・徳ノ島・喜界島・ 永良部島・与論島・桜島・垂水・ 新城・種ヶ島	138,353	北国	55,342
			畿内近江地方・山陰山陽	34,588
			江戸	27,670
			中東	20,753
小計		138,353		138,353
明治10年 (1877)	琉球・大島・徳ノ島・喜界島・ 永良部島・与論島・桜島・垂水	108,763	北国	43,505
			畿内近江地方・山陰山陽	41,330
			中東	23,928
小計		108,763		108,763

出典：藤田助七「砂糖商業調査要項答申書」（大阪市史編纂所蔵、1901年）

*天保11年（1840）の輸出項目の小計は、原文書の数字が異なるが、輸入の小計に合わせた数字を【 】で示した。

*表に示した地名は原文書のままである。

(2) 伊勢湾地域から大坂市場へ

大坂から伊勢湾への物資輸送が行われる一方、伊勢湾地域から大坂市場にも多くの商品が流入した。本節では青物（蔬菜）・醤油・海産物・薬種の事例を紹介していきたい。

①青物（蔬菜）

最初に取り上げるのは青物（蔬菜）であるが、近世大坂の青物流通で中心的な役割を果たしたのは天満青物市場だった。この市場は、堂島米市場、雑喉場（ごこば）魚市場とともに「近世大坂の三大市場」を形成し、町人たちの食生活に大きな貢献をしていた⁽⁴⁾。まず大坂で蔬菜を扱っている天満青物市場について、寛政年間（1789～1800年）の史料から紹介したい⁽⁵⁾。

天満青物市場には大坂以外の各地から大根や人参、さらには山菜などの諸商品が運び込まれるが、その寛政期の状況を示す史料の文面にある「淀川筋下り荷物」の項目には、京都の南に位置する伏見や淀を起点に、淀川を使って大坂へ移出される商品が多数掲載されている。そのなかで、伊勢湾沿岸および周辺地域からは、尾張国名古屋の独活（ウド）がある。独活はもともと自生していたものを商品として活用すべく栽培化していたのが尾張の生産者たちだった。当時、この尾張独活は全国的にも名を馳せており、消費者にも人気の商品が大坂へ出荷されていたことがわかる。また伊勢国からは蔬菜類ではなく、若布（ワカメ）と干瓢（カンピョウ）があげられる。天満青物市場であるにもかかわらず、水産物の若布を蔬菜と並べて取引をする。若布は海産物市場でも扱われているが、青物市場でも幕末まで継続して対象商品になってい

た。さらに美濃国からは、こちらも当地の特産品である大根類が到来し、細干大根、大根千切干といった商品名が登場するほか、果物では梨が出荷されている。これらの商品は、すべて淀川筋を介して大坂へ送付されたのか、これには大きな疑問が生じてくる。大量輸送を想定した場合には、伊勢湾から紀伊半島を経由し、大坂湾に向かう廻船を使ったこともあり得るだろう。伊勢湾との取引は淀川筋だけでなく、海運の利用も推測できることを指摘しておきたい。

なお、寛政年間から少しさかのぼるが、1771年（明和8年）に天満青物市場では12品目の商品に規制がかけられた。その12品目には、市場の間屋から仲買にしか売れない、間屋から他のところには流せない、という約定が設けられた。これが実際に守られたかどうかは不明で、ほとんど効果のない規制だと思われるが、ここで注目したいのは12品目が市場やその取引において極めて重要なものであったということである。先述した尾張の独活、伊勢の若布、駿河の茄子などが該当するが、特筆して流通上の規制や保護がかかってくる点で、大坂市場における存在感の高さを示唆したものと考えられる。

②醤油

加工品についても多くの物資が大坂に持ち込まれるが、ここで取り上げるのは醤油である。その概要について『大阪商業史資料』という江戸時代の大阪の商業について、明治の初頭にまとめた編纂資料をもとに分析してみたい⁽⁶⁾。

同書には醤油について、醤油問屋、問屋、という項目が設定され、それぞれの仕事や組織編成、そして幕府（大坂町奉行所）と

のやりとりが列記されている。現在に比べて近世から近代初頭における醤油は、醸造からの保存期間が短く、とにかく鮮度が優先されており、「すぐ腐ってしまうので近隣でしか販売できない」ということが、最初に強調されている。ただ、それでも近世前期には、「大坂京町堀には問屋70軒、仲買30軒余りが建っていた」といわれ、これら問屋・仲買ができ始めたころは「地製醤油」と称する大坂およびその周辺で造っている醤油を売買していた。

具体的な年次が判明する1753年（宝暦3年）には、備前国岡山、播磨国龍野の醤油が大坂市場で確認できる⁽⁷⁾。この龍野醤油などは現在に至るまで全国有数の産地として知られるが、近世中期にはすでに大坂への販路を持っていたことが理解できる。岡山や龍野から持ち込まれた醤油は、さきの問屋、仲買が相対して売買が行われていた。その後、文政年間（1818～30年）には紀伊国湯浅、讃岐国小豆島の名前が登場し、これら主要4か所が大坂の醤油流通において大きな割合を占めていたようである。それに加えて、時期は不定であるものの、本史料には「尾張名古屋から醤油を持って来る」という話が散見される。その点を考慮すると、4か所と合わせて尾張の醤油が当時の大坂醤油取引にある一定の影響を持っていたのではないかと推測できる。

③海産物—鳥羽藩領の荒布—

伊勢湾沿岸における特産物のひとつは海産物である。大坂では市場問屋の種別に基づき「塩魚」「干魚」「鰹節」などに分類されるが、いずれも食品市場において大きな存在感を示していた。これも『大阪商業史

資料』によると、多くの商品が伊勢湾から流入しているが、とりわけ産地として注目できるのは志摩国一帯である。海産物の宝庫とよばれる志摩では諸品の領外移出が活発に行われていた。

それについて、領主経済との関連性を含めて貴重な史実を紹介してくれるのは志摩国に本拠を置いた鳥羽藩（稲垣氏）と大坂商人において展開された荒布（アラメ）取引である。これについて少し背景を紹介しておこう⁽⁸⁾。

1725年（享保10年）に下野国烏山から鳥羽へ転封となった稲垣氏は、明治維新に至るまで3万石の領地を維持していたが、同藩の財政は常々良好とはいえず、しばしば領内の商人や地域有力者から、あるいは大坂などの領外商人からも借金を重ねていた。その一例は、大坂で大名相手の両替商を営んでいた鴻池（井上）市兵衛家の記録にもみえる⁽⁹⁾。鴻池市兵衛家と鳥羽藩のつながりは、1805年（文化2年）6月が発端で、以下のような状況が示されている。

【史料1】

文化二年丑六月御産物当地へ為御登有之二付、売支配御頼也、新規之事容易ニ難引受御断可申上心底之処、去子年合別宅新兵衛へ御米蔵元引請居候而御心底も御分有之二付五月十二日始而当地御出役方へ罷出候処、前文之通御頼有之出銀被仰聞御料理御盃被下、是迄は町内井筒屋平次郎殿御勤也、根組得と相メ候上、新兵衛方へ引受為致、此度ハ程能出銀相減候而相済候事御産物仕入金年三度為替仕、売代銀ヲ以其月々御勘定有之御趣也

これによると、市兵衛は鳥羽藩から大坂で売りさばく産物の売支配と出銀（鳥羽藩への融資）を依頼された。結果、その前年から鳥羽藩の蔵元を務めている市兵衛家の別宅新兵衛に任せ、出銀の方も若干抑えた形で藩との交渉を終えたようである。鳥羽藩の大坂商人との関係を考慮するとき、この記述にある「町内井筒屋平次郎殿」がこれまで鳥羽藩の産物販売を行っていたというのは注目できよう。後述するように、鳥羽藩は提携先である大坂の商人を何度も入れ替えており、このときも同様に取引先を変更したことになる。その後すぐに市兵衛は、別宅新兵衛の御用勤め、および自身の出銀によって同年6月10日に「御館入」に就任し、以後鳥羽藩としばらく良好な関係を築いていた。しかし、その結びつきはしだいに稀薄なものとなっている。

これより以前、鳥羽藩が大坂商人と接点を持つ契機となったのは、1773年（安永2年）のことではないかと考えられる。同年6月、大坂中之島1丁目の伊賀屋伊助と伊勢山田河崎町の宇田平蔵は、鳥羽藩に願書を提出し、志摩国海辺村々の荒布を役所が一括して買い上げ、その販売に関する支配を伊賀屋・宇田に委任してほしいとした。これはいわゆる大名家が領内の特産物を買上げ、大坂など領外へ販売する国産専売制度の一種だが、その背景には鳥羽藩が多額の借金を有しているため、その償却をしなければならないという事情がある。これに対し、海辺村々（20か村）は真っ向から反対を表明し、伊賀屋と宇田の提案を受け入れないよう役所へ歎願書を送っている。そこには流通の状態を物語る理由も添えられており、簡単に専売制度を導入することができないことも示唆されていた。

村々の主張によれば、今回着目されている荒布は以前より、大坂・伏見・備前国西大寺村の3か所になじみの問屋があり、経営が苦しいときには商品を納入する前に資金の先借りをするなど友好かつ実務的な信頼関係を持っている。そのためこれら問屋との関係を断ち切ることは適切ではないとしている。伊賀屋たちの願書がどのようになったか不明なものの、村々の供述から理解できるのは、荒布がすでに領外で販売されており、それに問屋商人が密接な関係を有していることや、先述の青物流通にあった「淀川筋下り荷物」の内容とも呼応するが、志摩の荒布は伏見へ出荷されている可能性に言及したことである。さらにほかにも、海辺村々に大坂や尾州・勢州から毎年買人がやってきて入札を実施しているとある。少なくとも1773年（安永2年）以前から、志摩の荒布が広域で取引された実例を示し、本稿の課題に即していえば、大坂との交易が活発だったことを教えてくれる。

鳥羽藩の荒布が専売によって大坂へ流通したのは、1805年（文化2年）である。1812年（文化9年）6月に大坂の鴻池屋新兵衛家と鳥羽藩領村々がとり交わした議定によれば、「去ル丑年（文化2年）より御当国産物点草（天草＝テングサ）・荒布之類、御地頭様御買上ニ相成大坂表へ為積登我等御蔵元役相勤候」とあり、荒布と天草を領主役所が買い上げて大坂へ出荷した事実を述べている。これは鳥羽藩の財政と密接な関わりをもっていると認識できるのは、続く1849年（嘉永2年）のことで、大坂の荒物屋半兵衛および山口甚四郎なる商人が海辺村々の荒布を販売することと相殺で、鳥羽藩は両名から借金を重ねていることがわかる。

鳥羽藩にとっては、領内の特産物を藩財政好転のきっかけにしようとしたことがうかがえるが、荒布など多くの物資が志摩から大坂へと流入した事実が確認できた。

④薬種

近世における貴重産品から特筆すべきであるのは薬種で、大坂の道修町をはじめ薬を扱う諸商人には重要なものであった。薬種とは文字通り、「薬の種」ということで薬の原料を意味するが、道修町には薬種仲買仲間という、薬種を売買している商人たちがおり、その記録から伊勢湾との関係を考察しておきたい⁽¹⁰⁾。

1807年（文化4年）8月の「覚」なる文書に出てくるのは、真珠と白粉の二つである。真珠や白粉が、なぜ薬の原料として取引されていたのか。たとえば、真珠は古代から解熱剤など、現在でいう風邪薬にあたるものとして重宝されていた。当時もちろん、きらびやかな装飾品としての使い方もあったと仮定するが、薬として利用度は非常に高く、高価な商品として扱われていた。とくに近世は養殖が進んでいない時代であり、貴重な代物だったのである。

この伊勢真珠に焦点を定めると、以下のような事実が浮かぶ。1806年（文化3年）8月23日、大坂道修町の薬種仲買・福嶋屋伊右衛門が伊勢真珠を買い付けており、このとき福嶋屋が買った真珠の値段は、1斤（約600グラム）につき銀7匁5分替えて、合わせて代銀77匁2分5厘であった。つまり、代銀77匁余りで換算すれば約10斤の真珠を買ったことになるが、さらに福嶋屋はこの真珠を1斤につき10匁5分で売却し、その代銀は108匁1分5厘になったとしているため、30匁ほど利

潤を上げたといえよう。

1807年（文化4年）7月19日、同じく大坂の薬種仲買・鳥飼屋猶蔵は、伊勢軽粉（けいふん・はらや）を購入したとの記載がある。この軽粉は白粉（おしろい）のことであり、これも1斤ごとの単価がわかり、鳥飼屋は代銀200匁ほどの利益を出していることが判明する。伊勢の白粉は、現在の松阪市の射和（いざわ）あたりで生産されており、大坂の薬種市場を支えていたことが理解できよう。

2. 堺と伊勢湾一貝取引をめぐる関係一

これまで大坂と伊勢湾の物資の輸送について事例を紹介してきた。続いて本章では、和泉国堺と伊勢湾との間において活発だった貝取引を詳しく述べていきたい。この貝とは、伊勢湾でたくさん収穫のあった蛤のことである。

その前提として、堺という都市の性格を簡単にまとめ、伊勢湾との関係を理解する一助としたい。現在、我々が抱く堺の都市的性格は古代・中世の先進的な貿易拠点と、近世の経済都市大坂に隠れた堺でおおよそ理解されているように考えられる。ただ、中世の貿易都市だった堺がまったく経済的に機能しなくなったわけではなく、近世においてさまざまな産業が成立し、商人たちが多数活躍していたことは言うまでもない。たとえば、本稿の主題とする伊勢湾との関係では近世初期に尾張藩の重臣で犬山城主となった成瀬正成が、家康に堺政所（堺奉行）を命じられて堺の町中を統括する。それ以降、大坂と同じように堺は幕府直轄の都市になり、和泉国や近隣地域における中核都市となっていく。ちなみにこの成瀬

氏は堺奉行を退いたあとも堺に屋敷を持っているようで、この側面からも堺と伊勢湾のつながりを示唆している⁽¹¹⁾。

もう一つ近世の堺について考えるために重要なのは、紀州徳川家の存在である。同家は御三家の一角を占め、大坂のみならず堺にも屋敷を持っており、当地の商人たちと緊密な経済的諸関係を結んでいた⁽¹²⁾。幕末の大坂での政治的混乱も含め、畿内の社会変革への対応に、この堺屋敷をうまく使っている様子がみえる。これを明らかにする桜井慶次郎は、大坂と堺の中間に位置する加賀屋新田の地主で、この土地経営だけでなく、銭相場、銭屋も営み、また大坂と堺にそれぞれ店を持ち、堺では紀州徳川家と西本願寺に出入りするなど、いろいろな取引を展開した。紀州徳川家の存在は、堺と伊勢湾の経済的交流を解明する一つの素材になると考えられている。

繰り返しになるが、江戸時代の堺がどのように語られてきたかという、とくに経済史では「江戸時代の大坂が成長を遂げるなか、堺は衰退していく」という「物語」が定説化している。この原因は、都市人口および商業人口の減少がまことしやかに指摘されているが、今までにいずれも明快な論証はない。大坂との成長において堺の衰退を主張するだけで、具体的な根拠がないことを明記しておきたい。

それでは、近世における堺の個性とは何か。これはすでに先行研究がふれるように「産業あるいは工業の都市であった」ということだろう⁽¹³⁾。近世中期の堺では商工業者の分布が明らかにされているが、その職種だけでも700~800ほどの数になる。本稿にも関わる蛤の加工をするような仕事も含めて、工業関連の産業は活発な展開を

みせていたと想定できよう。このような流れにおいて、以下の記述と史料を参照されたい。

(1) 小西家の沿革

堺の商人、小西家について説明を始めた。「小西家文書」は、現在堺市立中央図書館に所蔵されており総点数は58点であるが、残念ながらそのほとんどは作成年月日が付いていないため、正確な時期は明らかではない。しかし、筆者が全体の記述や内容、そして前後関係から類推すると、おおそ近世後期が中心であろうと思われる。文書の中に含まれるのは同家の由緒・足跡と、本稿の課題である堺と伊勢・尾張の間での取引史料である⁽¹⁴⁾。

小西家が居を構え、営業をしていたのは堺の中心部にある宿屋町大道であった。ここには、現在でも小西姓が多く、堺出身だとされる戦国大名の小西行長の父親小西隆佐もこのあたりで商売をやっていたらしく、堺の小西一党というのはこのあたりを拠点にしていたと想定される。ちなみに、大坂の道修町にも小西姓の薬商人が多く居住するが、こちらの小西は近江出身の者が比較的多く、堺の小西一族とは直接的な関係をとらえることができない。

ここで取り上げる小西家の当主代々は、1687年（貞享4年）の勘太郎から1868年（明治元年）清右衛門まで、①勘太郎、②十兵衛、③次郎右衛門、④徳次郎、⑤小十郎、⑥十次郎、⑦清右衛門の名前がみえる。また、古文書のいちばん古い年号のものは①勘太郎が書いている1687年（貞享4年）の「覚」で、屋敷は宿屋町にあることがわかる。この屋敷は、表3間半（約6.3メートル）、裏行21間（約37.8メートル）と広

大で、堺市中の一等地にこれだけ大きな家屋・店を所有していることは貴重な情報である。そして、少なくとも勘太郎の祖父の代から堺に住んでいるので、およそこの宿屋町には100年ほど住んでいるということは確実であろう。そうすると、おおよそ戦国時代にはこの場所に定着したと考えられよう。ただ、この勘太郎は小西家に生まれたのではなく養子として入っており、勘太郎の実父は堺の惣年寄を務めた酢屋治兵衛という人物であった。勘太郎はその治兵衛の実子だったのである。近世前期については断片的な内容を組み合わせることしかできないが、小西家は戦国時代から宿屋町に屋敷を持ち、町中の上層部にある惣年寄とも縁戚関係にあるような家柄だったと知ることができよう。

さて、小西家はどのような商売を手掛けていたのか。まず前期の段階では「長崎商内仕候」と出てくるため、当時は糸割符商人として長崎貿易に関わることが本業であったと思われる。堺商人全体において糸割符商人というのは花形で、堺商人の象徴ともいえる存在であり、その商人仲間に加わっていたのである。ただし、小西家にも転機が訪れ、1782年（天明2年）に⑥十次郎の父である⑤小十郎が病死してしまったため、幼くして十次郎が跡継ぎになった。このときに家存続の危機が起きているので、以下の史料を参照されたい。

【史料 2】小西家文書 56

天明2年（1782年）小西小十郎病死のため忰・十次郎より削減された糸割符株斤高の相続願い

乍憚以書付御願奉申上候
宿屋町小西小十郎病死仕

名跡忰

十次郎

幼少ニ付代判

小西和助

一私親小十郎義、糸割符株六拾七斤半頂戴仕難有仕合奉存候、然ル処小十郎義、当五月九日病死仕、早速名跡相続可仕処、小十郎存生中々身上不如意ニ罷在、死後ニ至一向取続も難相成、家屋敷沽却も可仕之処、御家名断絶致候段、一家共残念存、漸預世話逼塞致候而名跡相続仕候、依之奉恐入候御願御座候得共、頂戴仕来候糸割符株斤高之内五拾式斤半減少被為成下、残ル十五斤相続被 仰付被下候様奉願上候、糸割符之儀も御取締被 仰出長く御苦勞被為成下候而、近年之内ニハ割渡も出来仕候御趣重畳難有奉存候、斤高之儀は別而奉蒙 御高恩候儀御座候得は糸株減少之御願奉申上候筈も無御座候得共、前書奉申上候通借銀等相嵩ミ、其上私幼少ニ而極老之祖父相抱難洪至極罷在、漸一家共世話ニ而乍逼塞家名程相殘候仕合御座候得は、夥敷斤高頂戴仕候儀も当時私之身分ニは不相応之義御座候故、不願恐減少被成下候様奉願上候仕合御座候、何卒私成人之後、身上向取直し候品ニも相成候ハ、其節従先祖被下置候通糸株斤高頂戴被 仰付被下候ハ、重畳難有可奉存候
右之趣御願申上度奉存候得共奉恐入候申上事御座候間、何卒各様御堅慮之上宜敷被 仰上被下候様奉願候、依之以書付御願申上候、以上
天明二寅年九月 宿屋町

小西十次郎
 幼少ニ付代判
 小西和助印
 右十次郎御願申上候ニ付奥印仕候、以上、
 年寄
 小西作右衛門印
 糸割符御年寄御衆中

これは、十次郎が幼少のため代理として同苗和助が所属する糸割符仲間の年寄衆へ提出した文書である。この糸割符株を小西家は67斤半としていたが、小十郎が亡くなったので52斤半に減らすと明言している。おそらく幼い当主では商売ができないだろうから減らすということだったが、それを何とか元通りにしたいという請願書を出している様子がかがえる。この後、糸割符仲間との関係がうまくいかなかったためか、小西家は糸割符の生糸商売からしだいに薬種への経営転換を図ったのだろうと思われる。もちろん、それ以前から薬関係の仕事をしていたと考えられるが、近世後期に入ってくると、いくつかの証文や商業上のやりとりで「貝屋」を名乗ることもあるため、貝を商うことが常態化していることも視野に入れるべきだろう。

近世における堺の商工業者一覧では貝屋という業種は出てこないが、薬種を取引するなかで貝を扱うことは間々あるわけで、そのような形で薬種業に携わっていたとみるべきだろう。また、商工業者のなかには蛤具（こうぐ）屋という職種があり、蛤の加工を引き受ける専門の仕事であった。小西家が蛤を仕入れて、自分で加工した細工物を買ったりするような話はなかなか出てこないで直接蛤具屋を営んだのかは定かではないが、この家の商売として薬種屋、

貝屋、蛤具屋という関連業種として注目できる。堺の薬種屋は、1695年（元禄8年）に94軒、1757年（宝暦7年）に118軒あり、一方の蛤具屋は1747年（延享4年）に7軒、1757年（宝暦7年）に5軒と少ないながらも、専門の職種が成立し、営業していることが理解できる。

（2）小西家の貝取引

それでは、具体的な貝の取引について文書をもとに紹介していきたい。先述したように、近世後期に小西家が主たる生業として携わったのが蛤などを扱う貝屋であった。蛤の商品化に際しては、「晒貝（さらしがい）」と「生貝」の2種類があり、前者は乾燥させた状態で貝殻を利用するもの、そして後者は鮮度が問われる生きた状態のものだった。これらの2種をどのように使うのかは文書のなかでは明らかにされていない。ただ、いろいろと調べてみると、晒貝というのは胡粉（ごふん）といわれる顔料として、絵の具に用いられたり、人形などの飾り、菓子の器などにも用いられているようである。そして生貝は、産地である伊勢湾からそのままの状態ですべて運び、何らかの加工をしていると思われる。この場合は、顔料にするのではなく、むしろ食用や薬用として使う目的があるようである。薬用にする場合、主に貝の身の部分は皮膚薬に使い、そして殻の方はぜんそく、毒消し、解熱などに利用されたとある。補足として蛤の貝殻は、貝合わせという遊戯道具としても扱われ、堺で最も注目されていたのは碁石（白）に使うことだったようである。「工業都市」堺において、蛤はさまざまな用途があり、大変重宝な材料だったことが指摘できよう。

①入手先1：尾張国愛知郡下之一色村（現・名古屋市中川区）

小西家の蛤は仕入れ先が大きく二つに分かれ、その一つは尾張国愛知郡下之一色村であった。これについては、すでに重要な研究文献があり、近年では松田憲治の貴重な成果が認められる⁽¹⁵⁾。この論考では、非常に詳しく下之一色村のことが記述され、当地の古文書を積極的に活用しながら、この地域における漁業について分析が行われている。下之一色村の村高は1,474石で、そのうち3分の2ぐらいが成瀬隼人正の知行地で、残りが蔵入地（尾張藩の直轄地）であり、漁業の安定が村の経済を潤し、蛤、牡蠣、鰻などを名古屋や京都に送っていた。そして、今回取り上げているように堺にも蛤を搬送していたことになる。

小西家との取引相手は、この村の西川屋作治（作次）、貝屋忠治、綿屋市兵衛などの名前が登場する。彼ら取引先の人物たちは、実際に蛤を捕獲するわけではなく、産地の問屋として集荷を束ねる産地商人であった。そして、地域の中で貝類を買い取り、それを堺に売るといった商売をしていたのである。

【史料 3】小西家文書19

（封表）「泉州堺神明町中濱
小西清右衛門様 桑名
（印・■■■町・米両替飛脚・
松屋吉兵衛）
急用書 賃済」
（封裏）「大阪・〈マル江〉・定飛脚・江
戸屋平右衛門の印あり」
益御勇健被遊御座珍重御儀奉存候、然
者此度御荷物船積仕候二付御案内申上
候、

積附

淡州

国松船

十月廿九日

〈ヤマ・〉百俵 晒貝

メ西川屋作治殿荷物

右者尾張屋庄右衛門殿

御差図ニ付

運賃 百拾五匁

メ

右之通積入申候入津之砌御引合可被下
候、以上、

十一月七日 佐々部茂左衛門（印）

小西清右衛門様

ここでまずあげるのが、西川屋作治に関する史料である。年代不詳ながら10月29日付で、ここでは西川屋作治から小西家に「晒貝100俵を売る」ということで、ここに関わっている人たちを羅列的に明記している。まず、西川屋に荷物を「差図」するのは、大坂の尾張屋庄右衛門という商人で、伊勢湾を出るときに荷物の船積みをするのが桑名の佐々部茂左衛門であった⁽¹⁶⁾。そして、荷物を実際に輸送しているのは、淡路国の国松なる船頭の廻船で、運賃銀115匁となっている。この過程により、荷物自体は廻船で運んだことがわかり、一方で送り状などの文書については、佐々部が小西に飛脚を使って送っていることが看取できる。このように、堺、大坂、桑名が関わっているが、下之一色村が産出者であり、それに加えてこれらをつなぐ実際の輸送をしているのは淡路島の船頭であることは注目できる事実であろう。

【史料 4】小西家文書 20

益御勇健被遊御座候珍重御儀奉存候、
然者此度御荷物船積仕候ニ付、御案内
申上候、

積附

十一月廿八日 淡路豊吉船

〈ヤマ小〉八拾俵 晒貝

運賃貳百九拾六匁

為替金六兩貳分貳朱

三拾九へ

引合 五匁三分

ノ西川屋作治殿分

右之通ニ積入申候入津之砌御引合可
被下候、以上、

寅十二月六日 佐々部茂左衛門

小西清右衛門様

これも西川屋作治の事例で、寅年12月6日付とある。ここでは、西川屋から小西家に晒貝80俵が売られており、取引金額は金6兩2分2朱で為替にて支払いをしている。この為替の担い手は桑名の佐々部茂左衛門で、荷物の船積みをするのも同人であった。そして輸送は、前述の国松ではなく、豊吉というやはり淡路島の船頭の船が使われている。

【史料 5】小西家文書 19

年不詳 8月17日 下之一色村綿屋市
兵衛から小西利右衛門に宛てた書状

一筆啓上仕候、秋冷之砌ニ御座候得共、
先以御地御家内様御揃益々御壮栄ニ被
遊御入珍重之義ニ奉存候、扱当春は御
光来被下忝奉存候、其砌は何之風情も
無之御氣之毒ニ奉存候、且其砌御注文
之品段々^マ延引ニ相成候得共、五
月上旬ニ大貝相中寄合ニて五拾俵御積

入奉申上候得ハ、定而無事着仕り置御
入手被成下候と奉存候、荷積ニ付御案
内早速申上候筈之処ぶれい(無礼)仕、
筵引之段御書差出、則此度別紙ニ入付
書相認メ奉御札入候間御入帳以上

且御地者如何ニ御座候哉、当地は何ニ
よらす諸品大高直ニて困り入申候、晒
貝之義も直段大きく恐悦仕候得共、代
呂もの兎角払底ニて困り入申候、又々
御入用之品御座候得ハ早便ニて御注文
御申越被下御頼申上候、先は右積付御
案内迄申上度如此ニ御座候、早々以上
八月十七日

綿屋

市兵衛

小西利右衛門様

覚

一九百入	壹俵
一千入	貳俵
一千百	貳俵
一千貳	貳俵
一千三	貳俵
一千四	貳俵
一千五	貳俵
一千六	三俵
一千七	四俵
一千八	四俵
一貳千	四俵
一貳貳	七俵
一貳五	四俵
一貳七	七俵
一三千	貳俵
一三五	貳俵

ノ五拾俵

一金貳兩也 西川屋ノ受取

一金四兩也 左々部ニて為替受取

右之通ニ御座候間、御入帳以上

寅五月十二日積

綿屋
市兵衛
(印、〈マル市〉尾州・下之一色・綿屋
市兵衛)
小西利右衛門様

これは年不詳 8 月 17 日付の史料で、下之一色の綿屋市兵衛から小西利右衛門に宛てた書状であり、この年の春に小西が尾張の下之一色村に来たことがわかる。その際に小西は、綿屋市兵衛に対して貝を注文したが、地元からはこれを発送するのが遅れ、「5 月上旬に 50 俵積荷をした」とある。それで、5 月上旬に積荷はしたけれど、実際に荷積み の 文書が遅れていて、8 月 17 日に「この手紙に併せて同封する」としている。「当地（下之一色村）では諸品大高直で困り、晒貝の値段も大きい（高い）」ということも書いてあり、綿屋市兵衛が生産者から買い付ける際の値段が高くて苦勞していることがうかがえる。

②入手先 2：伊勢国桑名・今一色町（現・三重県桑名市）

入手先の二つ目は桑名の今一色町で、当地は地名辞典や市史などでみる範囲でも蛤、貝が名産であることがわかる。桑名で小西が付き合っている商人というのは、志賀屋九八なる人物である。全体を見渡すと、桑名で買っているものの中に晒貝はまったくみられず、基本的に生貝を仕入れているのが特徴といえるだろう。

【史料 6】小西家文書 56

年不詳 12 月 22 日 しがや（志賀屋）
九八から小西清右衛門が注文した生貝
130 俵を代金三両で積入する書状
御書面被下忝拝見仕候、如仰甚寒之砌御座候所弥御安康由可被遊御自珍重御儀奉存候、先達而御出被下何分風清無御座候、其砌生貝注文被下私方難有仕合奉存候、船頓と無御座ゆへ延引相成候、此度淡路豊吉船へ積入可申候而左様承引被遊可被下、尤金三両也、為替二而積入申候左様思召可被下候、先は右段申上度如此御座候、早々已上

覚

一小貝おとし
三拾俵
一生きし 百俵
メ百三拾俵也
内金三両為替
右之通御座候、以上、
十二月廿二日 しがや九八
小西清右衛門様

志賀屋九八から小西清右衛門への書状で、前述の尾張下之一色村での話と同様に小西が桑名の今一色町を訪ねた際に生貝を注文したところ、志賀屋では船の手配をうまくできなかったため、すぐに荷物を送れなかったことが記されている。それで今回、淡路島の豊吉船を使うことができたので、そこに積入をした、という内容があり、志賀屋は代金 3 両を為替にて豊吉船へ支払い、生貝 130 俵を小西へ送りたいとしている。

(3) 貝取引とその背景

小西家文書が伝えるいくつかの事例を紹介してきたが、この堺と伊勢湾における貝取引について以下のような特徴を結論づけることができるだろう。

第一に、伊勢湾という貝の産地、および流通拠点についてである。これは先行研究でも述べられるように、漁業あるいは漁業権、また伊勢湾地域の漁業のあり方が特徴として関わってくるのではないかという見通しが立てられる。

第二は、たびたび小西家の史料からもその名が知れる桑名の佐々部茂左衛門という人物の存在であろう。佐々部は、尾張の下之一色村、桑名の今一色町のどちらにも関わっており、この地域では重要な商人だと指摘でき、この佐々部の存在こそが小西家の貝類取引を円滑にしているとも評価できる。

第三は、実際の商品の輸送がどのように運用されていたのかをみることである。本史料だけでみると淡路島の船が登場し、その担い手として動いていることがわかる。前述の志賀屋の事例でもわかるように、なかなか船が見当たらず、ようやくこの船を見つけたというのが淡路島の船頭の船だったという事例もある。ただ、どのように輸送する船を確保するのか、またどのように積荷および搬送契約を結んでいるのかについて詳しい検討が必要になる。しかし、少なくとも伊勢湾界隈の船でなくても、この地域に入ってきて大坂まで商品を持って行くのは当たり前なのだろう、ということがうかがえる。

おわりに

近世大坂と伊勢湾の経済的諸関係について、いくつかの事例をふまえながら検討を加えてきた。最後にまとめとして、いくつかの成果と今後の課題にふれておこう。

近年の研究成果から鑑みれば、近世流通史において地方廻船の活動が注目され、内海船の経営動向が具体的にわかるようになってきた。そのなかには、伊勢湾地域と上方、江戸などを結ぶ廻船のありようが解明されつつあり、伊勢湾から大坂へ、という流れも示されている。一方で、大坂から伊勢湾沿岸をどのようにみるか、という重要な課題は今もって深められてはこなかった。大坂と江戸という視座はよく耳にするが、その中間にあってしかも交流が濃い東海地方との接点はなかなか見出せずにきた。本稿の取り組みは小さいながらもその課題へ向き合う第一歩に位置づけたい。

大坂と伊勢湾地域における物流で扱われるのは米穀や酒類、木綿といった商品であろう。もちろんこれらの分析なくしては両地間の流通が明らかにはならない。しかし、実際に人々の生活に密着する商品を消費者および生産者をふまえて考察することには大きな意義がある。

また、堺と伊勢湾の関係をみて気づくことは、江戸時代のものづくりについて深く知る必要があることだと思う。ほとんど考えてこなかった貝類については、原料が伊勢湾から大坂湾に入ってくる。そのなかに堺には加工を担う職人がおり、彼らが手を加えることでまた異なる地域へと商品が出荷される。そのような複層的な物流の諸関係ができたことにより、日本列島全体の流通が活性化するのである。

注一覧

- (1) これまでの成果として、曲田浩和「大坂登り下り船問屋と内海船—十八世紀後半から十九世紀初頭を中心に—」(『知多半島の歴史と現在』11、2001年)、高部淑子「新たな尾州廻船研究に向けて」(『知多半島の歴史と現在』13、2005年)などがあげられる。
- (2) 市村高男「日本中世の港町—その景観と航海圏—」(歴史学研究会・深沢克己編『港町の世界史2 港町のトポグラフィ』青木書店、2006年)。
- (3) 荒武賢一郎「大坂市場と琉球・松前物」(菊池勇夫・真栄平房昭編『近世地域史フォーラム1 列島史の南と北』吉川弘文館、2006年)。
- (4) 荒武賢一郎『屎尿をめぐる近世社会—大坂地域の農村と都市—』(清文堂出版、2015年)。
- (5) 大阪市史編纂所編『天満青物市場史料』上(大阪市史料調査会、1990年)。
- (6) 大阪商工会議所編『大阪商業史資料』29(大阪商工会議所、1964年)。
- (7) 長谷川彰『近世特産物流通史論—龍野醤油と幕藩制市場—』(柏書房、1993年)。
- (8) 以下、鳥羽藩領の荒布については『三重県史』資料編近世3(下)(三重県、2012年)を参照。
- (9) 「井上淡水記録2 鳥羽藩」(東北大学附属図書館狩野文庫収蔵)。鴻池(井上)市兵衛家や、井上淡水の史料に関しては、荒武賢一郎「近世後期大坂商人の記録と情報—鴻池市兵衛家の史料から—」(荒武編『世界とつなぐ 起点としての日本列島史』清文堂出版、2016年)を参照されたい。
- (10) 前掲史料(6)。
- (11) 『堺市史』第2巻(堺市役所、1930年)。
- (12) 荒武賢一郎編『桜井慶次郎日記』(大阪市史料調査会、2009年)。
- (13) 吉田豊「江戸中期の都市製造業と商品流通」(『関西大学考古学等資料室紀要』7、1990年)、同「堺と大坂—江戸中期の畿内商工業—」(地方史研究協議会編『巨大都市大阪と摂河泉』雄山閣出版、2000年)。
- (14) 荒武賢一郎「堺商人・小西家と伊勢湾—「貝屋」経営と地域間流通—」(堺市立中央図書館『堺研究』31、2003年)。
- (15) 松田憲治「伊勢湾における漁業権と地域社会」(岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』第三篇 清文堂出版、2007年)。
- (16) この佐々部茂左衛門については、前掲論文(1)[曲田2001]に詳しい。